

令和五年九月七日(木)

兼題『立秋』、席題『鳴』

定例会を開催。出席者は十三名(投句十四名)。

大津 そうかい

少年の日より飛来のやんまかな

人去りし別荘の秋自鳴鐘

秋暑し詮なき愚痴の相手せる

付合ひの長き爪切秋の夜半

慰霊碑の反射優しき今朝の秋

首藤 しずを

パソコンの取説厚き残暑かな

雷鳴や遠ざかる間も厳かに

万物の息をひそめる日の盛り

異次元にふつと消えたる蜻蛉かな

老松の姿正しき今朝の秋

松田 一文字

火の点のつながる闇や大文字

秋めくや竹林ぬける風の音

秋立つや棟上げ式の白柱

豪雨後の入道雲の仁王立

秋風や白く泡立つ大鳴門

中村 晃也

夏鶯高鳴く峡の丸木橋

熊よけの鈴鳴らしつつ茸狩り

大杉の梢に幽か秋の声

この先の峠越えれば秋の色

一匹が鳴いて全山蝉しぐれ

浜口 須美子

雷鳴やブランコのまだ揺れのこる

遺されし服装日記秋立ちぬ

まるむしころりいまできることできぬこと

片寄れる雲を散らしてブラシの木

雷鳴や錠剤一粒掌より逃げ

安藤 晃二

仏塔の背ナや名月雲千切れ

積乱雲高し夕陽の赤の燃え

數蘭の彩り淡し秋に入る

雷鳴との駆け引きに負け足止めに

八ドソンの大河に一帆秋立ちぬ

宮原 凧

なで肩の女系の家族彼岸寺

雷鳴の闇を切り裂き大あらし

夏果てや海の群青深まりぬ

しをしをと音なく雨に秋立ちぬ

立秋や土器片ならぶ縄文展

森田 元斐

咲き頃を植木屋に聞く百日紅

沸騰の地球の路傍芒咲く

秋立つ日惣菜売り場の人の列

白球にどよめく悲鳴雲の峰

湯上りへ一陣の風冷やし酒

志村 良知

雷鳴に豆柴まるむソファの下

雨に焚く門火の煙低く這ひ

魂棚の絢爛曾孫らのはしやぎ声

遠富士の縁取り確と秋立ちぬ

一切の衆生を覆ふ残暑かな

高橋 由紀子

コスモスの溢るペンション人もなく

山連連と秋明菊に夕陽落つ

もろこし届きシンク一杯皮とひげ

雨上がり鳥の鳴き交ふ柿の秋

しやがれ鴉の声を遠くに秋たちぬ

内藤 まりこ

日々同じこととして終わる猛暑かな

かぶと虫少年の指緊張し

立秋や肌の寒暖なにげなし

雷鳴に雷神探す好奇心

夕まぐれぼつと輝芙蓉かな

長尾 進一郎

初鳴きに庭の奥から合はす声

庭草の色増す日々や八月尽

朝露の光る草々多摩の土手

立秋や積みし宿題夢に出る

落蟬を拾ひてそつと木に戻し

新田 ゆふき

カーテンを引きて傷見る処暑の朝

空覆ふ雲に魚影か処暑の雨

さやしや紙に走らす今朝のペン

エアコンと競うてゐるか虫の鳴く

秋立つや池に木立を揺らしつつ

西川 知世

ベランダに鴉来ている今朝の秋

送り火の跡に名残の熱少し

秋立つや樹幹の熱を鎮めつつ

立秋の雲疾く走る麻布かな

秋の昼早瀬に佇ちて鷺一羽

次回は令和五年十月五日（木）、
兼題は、季語「新米」（大津そうかいさん出題）、
席題は西川知世さん出題の「待」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

新米（今年米・早稲の飯・古米・新糯・新糠）

今年収穫した米、十月ごろに早稲の米が出回る
が、年々早まっっているように思う。近年ブランド
米が盛んで、私はその差がよく判らないまま、美
味しくいただいている。

和歌や連歌にはあまり登場しないと聞く。生活
に即した俳諧に合った季語なのであろう。食べた
喜び、穫れた喜び、食べ物の季語は美味しく作る
という教えがあるが、ペン俳句では、それぞれの
感覚で新米を寿ぐ句が出てくることを楽しみにし
ている。

新しく仲間入りした人を新米と言うが、新前の
音転だそうで、季語とは関係しないそう。

熊野路や三日の糧の今年米

蕪村

鉢の子に煮立つ粥や今年米

太祇

新米の膳に居るや先祖並み

一茶

野沢菜の届きぬ炊けよ今年米

水原秋櫻子

新米のかほり飽のよく研げて

高村光太郎

どの家も新米積みて炉火燃えて

高野素十

新米といふよろこびのかすかなり

飯田龍太

新米のつめたさを掌より流す

川本臥風

新米を量りしあとに嬰のせる

岸野成子

病む母の粥にまづ炊く今年米

根岸善雄

新米にしばらく両手うづめけり

栗林明弘

新米の五指で不足や配り先

細谷定行